

Emily Dickinson に於ける 〈白〉 の意味

——“White Election” から “White Exploit”へ——

The Meaning of “WHITE” in Emily Dickinson

——from “White Election” to “White Exploit”——

勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。

(ヨハネの黙示録 3・5)

東 城 真 造

序

Emily Dickinson (1830—1886) は Massachusetts 州の Amherst に生れ、子供の頃は、New England の少女と変らない普通の生活を送った。しかし30才の頃から純白のドレスを常時身にまとい、56才で死ぬまで一生家に引きこもり、一種の隠遁生活を通した。そしてその間に、1775篇に及ぶ詩を、わずか数篇をのぞいては発表することもなく、静かに書き続けたのである。

人生をより深く凝視しようとした彼女の隠遁生活は、言ってみれば、内なる生活のための、setting であり、計算された選択でもあった。そうして一種の欠乏の生活から湧きでるところの、より真実なものを知ろうとする精神的な勝利への偉業を、彼女は成しとげたのである。つまり Dickinson の生涯は “White Election” から “White Exploit” への空間的な心の探索ではなかったろうか。

そこで Dickinson のこのような symbolic な生き方を、彼女の愛読した「ヨハネの黙示録」や、彼女の残した詩の幾つかから探って、Dickinson に於ける〈白〉の意味を考えてみたい。

彼女の詩の主なテーマは ‘love’ であり、‘life’ であり、‘death’ であり、‘eternity’ であった。仮にそれらが一つの円周上にあるとすれば、それらが連鎖している ring のような役割を果しているのが〈白〉のイメージである。それ故に、Dickinson にとって〈白〉がどんな意味をもっていたのかを考えてみるのも、興味あることではないかと思われるのである。

I

最初に一つ明確にしておきたいことがある。それは Emily Dickinson における隠遁生活の

意義である。何故なら、それはある意味では彼女の真の詩人としての *starting point* でもあったからである。彼女がいわば現実から逃避した理由については、研究者の間でよく論じられる所であるが、決して単純なものではなく、多くの要因を含んでいたと思う。例えば、妻子ある牧師 *Charles Wadsworth* との失恋などは、確かに一つのきっかけとなる影響を及ぼしたことは否定できないにしても、彼女に当てはめるには、あまりにも甘い考えのように思える。(1)

しかしながらそういう理由はともあれ、*Allen Tate* が *Dickinson* 論の中で言っているように、「家に閉じこもったという行動」そのことの意味の方が重要であろう。この点について彼は、*Conrad Aiken* の「ディキンソンは慎重な熟慮の上で、みずから進んで隠遁生活の方を選んだ」という言葉を引用して、次のように述べている。

The problem to be kept in mind is thus the meaning of her “deliberate and conscious” decision to withdraw from life to her upstairs room. . . . All pity for Miss Dickinson’s “starved life” is misdirected. Her life was one of the richest and deepest ever lived on this continent. When she went upstairs and closed the door, she mastered life by rejecting it. (2)

つまり *Dickinson* の「隠栖」にたいする同情は見当ちがいである。彼女の生涯は………精神的に最も豊饒で深遠な人生の一つだった。彼女が2階に入り戸を閉めたときに、彼女は人生を退けることによって、実は人生を克服したのだ………と述べている。ピューリタンの家庭に育ち、内省的で、良心に誠実であろうとする彼女は、決して悲劇のヒロインのようなものではなかった。それは晩年、文学上の助言者であった *Higginson* に語っているが、彼女自身が、“I find ecstasy in living; the mere sense of living is joy enough.” (生きることによって恍惚を覚え、生きているという意識だけで、もう大変な喜びである。) (3) と述べていることからでも明らかである。そして更に *James Reeves* は、

That she took to dressing in white and refused to see callers except by proxy, through her sister, was part of the drama; she played as a setting for her inner life. . . she did not reject life in its more permanent aspect; she withdrew in order to apprehend it more fully and with greater concentration of purpose. (4)

と述べている。つまり人生のドラマの舞台を彼女自身で作り上げたのである。言い換えれば、純白のドレスにつつまれた隠遁生活は、計算された人生の選択でもあったわけである。

Dickinson はそのことを〈白い選択〉と呼んでいる。

528 (1862)

Mine - by the Right of the *White Election*!

Mine - by the Royal Seal!

Mine - by the Sign in the Scarlet Prison -

Bars - cannot conceal!

Mine - here - in Vision - and in Veto!

Mine - by the Grave's Repeal -

Titled - Confirmed -

Delirious Charter!

Mine - long as Ages steal! ⁽⁵⁾

「白い選択の権利によってわたしの所有」で始まるこの詩の〈白〉のイメージは、何の象徴であろうか。Charles R. Anderson は “To pin down the exact significance of ‘White’ for Dickinson is impossible.” (ディキンソンにおける〈白〉の意味を正確にくださことは不可能である) ⁽⁶⁾ と言っているが、Austin Warren は次のように述べている。

Emily's “white election,” we know, began around the year 1862. This “white election”: could it not have been Emily's acceptance of Death, her suicide without suicide?. . . . White is the color for her kind of death-in-life. ⁽⁷⁾

つまり〈生に於ける死〉の象徴である。もっと言い換えれば、精神的な死を通して、真の生を見出そうとする Dickinson の決意である。外面的な人生を退き、靈的により強く生きようとした姿でもある。

II

このように考えてくると、また別のイメージが私には浮んで来る。というのは、この詩全体が「ヨハネの黙示録」の内容に似ているからである。純白のドレスを身にまとう Dickinson の〈白い選択〉は、復活体の栄光の象徴ではないであろうか。「黙示録」の第3章に

They shall walk with me in white: for they are worthy. He that overcometh, the same shall be clothed in white raiment; and I will not blot out his name out of the book of life, . . . Him that overcometh will I make a pillar in the temple of my God, and he shall go no more out. ⁽⁸⁾

と書かれているように、「白い衣」は勝利を得て永遠なる神の国に生きる保証である。純白のドレスを着て、ほとんど家から出なかった Dickinson の姿がここにはある。また “Mine-by the Royal Seal!” (王国の封印によってわたしの所有) は、「黙示録」の第5章から第7章にわたって述べられている、天国に於ける「七つの封印」(遺言書のこと)⁽⁹⁾ の話から、死より復活へと苦難を通して「勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」⁽¹⁰⁾ といわれるあの再臨のキリストと同じように、王国に入る約束の象徴ではないだろうか。更に “Sign in the Scarlet Prison” (真紅の牢獄に秘めた印) が “heart” または “passion” の比喻から、外的、物質的なもの “Bars” より、内的、霊的なものに、その優位を認める彼女の精神的、宗教的な生活の方向が示されている。第2スタンドでは更に明確に、「黙示録」の全般にわたって説く〈幻の世界〉のイメージが、“Mine-here-in Vision-and in Veto!” (現世で拒まれても幻の世界でわたしの所有) の一行に感じられる。そして次の “Grave’s Repeal” (墓の廃止) によって、死を廃して復活へとよみがえり、やがて “Titled” つまり花嫁の称号が与えられるということは、「黙示録」の神の国、永生の成就をうたったキリストと教会の結婚のイメージである。

Let us be glad and rejoice, and give honour to him: for the marriage of the Lamb is come, and his wife hath made herself ready. And to her was granted that she should be arrayed in fine linen, clean and white. ⁽¹¹⁾

とあるように、「(神から) 白い汚れのない衣を着ることを許された」とは、とりわけ、“Delirious Charter!” (心が酔うように嬉しい特許状) をもらった花嫁であり、つまりは花嫁のイメージをもつ Dickinson が、新しい時代に完成した生活をいとなみ、最初の行で示された神の国への保証が、最後の行の “Mine-long as ages steal!” (幾世を経ようともなおわたしの所有) によって、永生への実現を象徴しているのではなかろうか。

このような聖書のイメージを Dickinson にあてはめることについて、Charles R. Anderson は、

Her stolen images (from the Bible), though sometimes overtly used, are normally assimilated to her own style by being wrenched into unexpected contexts, or so submerged in her poems that only long peering below the surface reveals their allusive richness. . . . In fact, her battling with language is quite similar to her skirmishes with the Bible, The Word, poking them both to make them come alive. . . . In a sense, the Bible was the divine adversary she must overcome by assimilation in order to utter her own scriptures. ⁽¹²⁾

と述べている。つまり彼女の聖書から盗んだイメージは、詩の中にあまりにも深く浸入していて、表面に現われない部分を十分に凝視することによってのみ、それらの暗示的な豊かさがわかる場合がある。事実、彼女の言葉との戦いは、全く聖書や聖書の言葉との小ぜり合いに似ており、それらをつつくことによって、彼女の使う言葉を生命あるものにする………と言っている。実際他の多くの詩でもそうであるが、例えば “There came a Day at Summer’s full” (# 322) の詩などは、「黙示録」の復活のイメージをかりて、愛の苦悩と克服とを描いていることは明白である。

特に「ヨハネの黙示録」に私が執着したのは、Dickinson が愛読書として、詩人では Keats, Mr. & Mrs. Browning をあげ、散文では Mr. Ruskin, Sir Thomas Browne, それに Revelation, つまり「黙示録」を上げているためである。⁽¹³⁾ そこで Dickinson と類似する点があるように思われる「ヨハネの黙示録」の特徴を、簡単にまとめておきたい。藤井武の「黙示録研究」⁽⁴¹⁾によると、特に、文学としての「黙示録」は

1. 神の靈魂の戯曲である。

靈魂が最も偉大であることを綴った記録で、キリストが栄光の中に再臨し、彼によって力強い神の国が建設されて、永生へとなるドラマである。

2. 文体は極端に象徴主義である。

見える物の世界は、顕われていない心の世界からなり、物質は精神の比喻であり、自然は靈魂の象徴であるとして描かれている。

3. 美しい黙示であり詩である。

ベンスンの「非文法の文法」をとりあげ、文体の特徴が、その内容に伴うところの必然の結果で、それ自体に於て立派な詩である。

4. 比類のない希望の書である。

苦難の意味と天国の希望とについて書かれたもので、希望は栄光の予感であり、祝福の保証であるとされている。

と述べられている。以上のように列挙してみる時、象徴的に死とか永遠とか、あるいわ魂について詠い、James Reeves も指摘している⁽¹⁵⁾ように、文法の間違い、韻の悪さなどをあげられる Dickinson と、「黙示録」とは、何か相通ずるものがあるように思われるのである。

III

さて今の詩によって、白のイメージが<勝利>の意味をもっていることを「黙示録」を通してみてきたが、次の詩はそれをもっと具体的に表現している。

325 (1861)

Of Tribulation, these are They,
 Denoted by *the White* -
 The Spangled Gowns, a lesser Rank
 Of Victors - designate -

All these - did conquer -
 But the ones who overcame most times -
 Wear nothing commoner than *Snow* -
 No Ornament, but *Palms* -

この詩においては、まさに白は勝利の象徴であるが、それは苦難を乗り越えてきた勝利なのである。第2スタンザでは、やはり白のイメージの〈雪〉で真の勝利者を表現し、最後に、戦いの後の勝利と喜びを示す“Palms”という語で決定的に述べている。この詩も、やはり「ヨハネの黙示録」の parody であろう。次の一節と比較すれば明瞭である。

After this I beheld, and, lo, a great multitude. . . stood before the throne, and before the Lamb, clothed with *white robes*, and *palms* in their hands; . . . And he said to me, *These are they which came out of great tribulation*, and have washed their robes, and *made them white* in the blood of the Lamb. ⁽¹⁶⁾

「……………白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立った。……………すると彼はわたしに言った『彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである』」と書かれている。

そしてこれはまた Dickinson 自身が実際に行ったしぐさである。まれにしかないことではあったが、訪問客に会う時は完全に白づくめの衣裳で、手に花をたずさえ、ほとんど芝居じみた現われ方をしたのである。⁽¹⁷⁾ 1870年の8月16日に、Higginson が会った時には手に花を載せ「これらの花が私の紹介です」と言ったと伝えられている。何か聖書の中の人物が実際に現われたような、幻想的な雰囲気さえ感じられる。

次の詩は、ひそかに愛している相手と一緒に暮らすことが不可能なことを、色々と想定している詩である。

640 (1862)

I cannot live with You -
 It would be Life -
 And Life is over there -
 Behind the Shelf

* * *

They'd judge Us - How -
 For You - served Heaven - You know,
 Or sought to -
 I could not -

Because You saturated Sight -
 And I had no more Eyes
 For sordid excellence
 As Paradise

And were You lost, I would be -
 Though My Name
 Rang loudest
 On the Heavenly fame -

And were You - saved -
 And I - condemned to be
 Where You were not -
 That self - were Hell to Me -

So We must meet apart -
 You there - I - here -
 With just the Door ajar
 That Oceans are - and Prayer -
 And that *White Sustenance* -
 Despair -

この詩は12のスタンザからなり、Dickinson にとっては比較的長いものであるが、そのうちの最初のスタンザと後半の5つのスタンザをここに引用している。この中に出て来る“*You*”は「あなたは天に仕えた方、少なくともそれを求めて生きた方」という表現から考え、それに〈白い選択〉の始った頃の1862年の作品ということで、多分 Charles Wadsworth 牧師ではないかと想像される。引用の後半の部分を簡単にまとめてみると「あなたに眩惑されて、私はもう『楽園』などという穢れたすばらしさをみようという気にはなれなかった。あなたが地獄に落ちれば私も一緒に落ち、あなたが救われて天国に行けば、私はもうそれだけで地獄と同じである。それ故に、私たちはあちら側とこちら側に別れ、あまり親しくない者同志が会う時の習慣のように、ドアを少し開いて窓越しに会わなければならない。そこには海があり、祈りがあり、あの白い暮らしがある……」というのである。つまりこの地上ではどうしても一緒に生きることが出来ない実現不可能な *love* なので、この世的な愛を捨ててしまっ、精神的なあいびきのうちに靈的に生きようというのである。これはとりわけ天国で結ばれる花嫁のイ

メージであり、「黙示録」の世界に生きようとする Dickinson の姿でもある。彼女はそれを〈白い暮らし〉と呼んだのであろう。

この詩はかなり難渋で、実際 Archibald MacLeish も “Who can describe the graphic shape of ‘…… that white sustenance / Despair’?” (誰が一体『あの白い暮らし／絶望』の図形を描くことができようか) ⁽¹⁸⁾ と言っているように、解釈も想像の域を脱しないが、“I had no more Eyes / For sordid excellence / As Paradise” (楽園などという穢れたすばらしさをみようという気にはなれなかった) というのは、当時の疑惑に満ちた教会などに対する反抗であろう。また “You there-I-here” は、後に 365 番の詩においても述べるつもりでいるが、“door” が精神的、霊的世界への扉の象徴として「あなたは物質的な世界に、私は永遠なる神の国に」ドアを境にして住むというぐらいの意味であろう。そして彼女の住む永生には〈海〉が象徴する〈死〉より甦えった永遠の命があり、祈りがあり、花嫁姿の〈白い暮らし〉があるというぐらいであろう。最後の “Despair” は理解できないが、現実のこの世界に生活していて、心の底にあった言葉を、ふと付け加えたようにも思われるのである。

IV

次に “white” という語以外の、白いイメージをもったものを少しみてみよう。その第一は、先の詩にも出てきたが、やはり〈雪〉による白のイメージである。

135 (1859)

Water, is taught by thirst.
Land - by the Oceans passed.
Transport - by throe -
Peace - by its battles told -
Love, by Memorial Mold -
Birds, by the Snow.

この詩 ⁽¹⁹⁾ の最後の行が、私には実に美しくて印象深いところである。それだけではなく、Dickinson の哲学がこれ程見事に簡潔に凝縮して述べられた one line はないと思う。宝石でも見るような思いがする。一見何の変哲もない平凡な事象を、互いに反対のものを並べて述べているだけのようであるが、しかし白のイメージをもった最後の一行が、何か不釣り合いなのである。何故単なる自然描写をここにだけもって来たのであろうか。さらりと言ってのけられた言葉のようであるが、しかし非常に緻密である。上から順に見ていくと、子供でも知覚できるような本能的な事柄から、一般的な事柄へとすすみ、“Love by Memorial mold” (愛は思い出の肖像によってわかる) は、Dickinson にとっては 苦い経験があるだけに 特別な事柄であろう。そしてそういう世俗的なものを乗り越えた永遠の世界が、つまり永生の事柄が “Birds

by the Snow” (鳥たちは雪によってわかる) に描かれているように思われる。降り積った雪と鳥との美しい状景から、冬と春のもつ静と動のコントラスト、更には冬の厳しさから輝かしい春へのイメージ。その上 Emerson や「黙示録」と同様に、Dickinson にとって自然が人間的な内面の象徴風景であるとすれば、この一行は苦難と希望であり、〈死と復活〉ではなかろうか。一年が一廻りして再び春が来たことを告げる使者である鳥、「ノアの箱舟」⁽²⁰⁾ にオリーブの若葉をくわえて帰ってきた鳥 (鳩)、それは新世界への希望であり、来世存在の証明であり、概して生命の復活の象徴といえよう。つまり〈雪〉によって象徴される現世の欠乏 (死) によって、〈鳥〉に象徴される来世の約束 (復活) が告げられるのである。これは、希望が苦難の果てにあると説く「黙示録」の世界である。わずか4語からなる一行ではあるが、Dickinson の〈白〉のイメージを考えてきた今は、まことにこの言葉の裏に広がる世界の大きさに驚くばかりである。Shelley の “If Winter Comes, can Spring be far behind?” (冬来りなば春遠からじ)⁽²¹⁾ というあの句よりも私には深みのある言葉である。同時にまた James Reeves の言葉も思い出されるのである。

She lived, . . . in effect, in a single room; but the universe of her poems is immense. There are few poets, if any, who can suggest such large areas of proved emotion and experience in so few words. ⁽²²⁾

確かに Dickinson は、俳句にも似た非常に短い言葉の中に、感情と知覚とを無限の広さで賞翫させてくれるように思われる。彼女の言葉でいえばまさにこれが “Essential Oils” (# 675) であろう。

この詩のように白のイメージをもったものが、〈死〉を表わす詩は、Dickinson には多い。他にも2, 3かかってみよう。

104 (1859)

Why, I have lost, the people know
Who dressed in *frocks of purest snow*
Went home a century ago
Next Bliss!

216 (1861)

Safe in their *Alabaster Chambers* -
Untouched by Morningg -
And untouched by Noon -
Lie the meek members of the Resurrection -
Rafter of *Satin* - and Roof of *Stone*!

221 (1861)

It can't be "Dying" !
 It's too Rouge -
 The Dead shall go in *White* -

その他興味あるものとしては、次のような詩もある。

105 (1859)

Affords the sly presumption
 That in so dense a fuzz -
 You - too - take Cobweb attitudes
 Upon a *plane of Gauze* !

124 (1859)

In lands I never saw - they say
Immortal Alps look down -
 Whose Bonnets touch the firmament -
 Whose Sandals touch the town -

V

次に白のイメージが神秘性を帯びた詩を見てみよう。「死」や「永遠」や「神の世界」を求めつづけた Dickinson には当然のことであるが、白はまた〈神秘〉の色でもある。まず、wedding dress を着る結婚式のイメージでもって詠った詩がある。

271 (1861)

A solemn thing - it was - I said -
 A woman - *white* - to be -
 And wear - if God should count me fit -
 Her blameless mystery -

 A hallowed thing - to drop a life
 Into the purple well -
 Too plummetless - that it return -
 Eternity - until -

この詩は厳粛な結婚式に於ける花嫁を「汚れのない潔白な神秘」とみなし、第2スタンザでは神に命を捧げて永生に入っていくことを述べている。“purple well” (真紅の井戸) はキリストの十字架の象徴で、それに命を捧げることは、神を信ずることであろう。このように考えて

みると、第1スタンザの結婚式のイメージも、やはり“if God should count me fit”（神が私にふさわしいとお思いなら）から宗教的なものが感じられ、〔註〕の(11)であげた「黙示録」の、キリストと花嫁（教会）との結婚のイメージを思い出す。神の永遠の世界は神秘の世界である。Dickinsonの文学的生涯は、そこに入っていくとしようとするもがきでもあったと言えよう。

次にあげる詩はそういう神秘の世界に入っていくとしようとする魂が、不可解な淵のところで、前進することも後退することも出来なくなり、^{おそれ}畏にうたれる。前方には永遠の白い旗があり、「開けたる門」⁽²³⁾の彼方に天を望んで神を見るのである。

615 (1862)

Our journey had advanced -
Our feet were almost come
To that odd Fork in Being's Road -
Eternity - by Term -

Our pace took sudden awe -
Our feet - reluctant - led -
Before - were Cities - but Between -
The Forest of the Dead -

Retreat - was out of Hope -
Behind - a Sealed Route -
Eternity's White Flag - before -
And God - at every Gate -

この詩に於ける白は<永遠>の象徴であり、神のイメージでもある。Dickinsonは神の属性にやはり白のイメージを与え、神聖さを強調している。

709 (1863)

Publication - is the Auction
Of the Mind of Man -
Poverty - be justifying
For so foul a thing

Possibly - but We - would rather
From Our Garret go
White - Unto *the White Creator* -
Than invest - Our *Snow* -

“Publication-is the Auction / Of the Mind of Man”（出版することは人の魂の競売で

ある) は、いかにも Dickinson らしい言葉であると思う。

更に次の詩は、白のイメージが宗教的、神秘的なものではあるが、彼女の romantic な一面をもものぞかせている。

365 (1862)

Dare you see a Soul at the *White Heat*?
 Then crouch within the door -
 Red - is the Fire's common tint -
 But when the vivid Ore
 Has vanquished Flame's conditions,
 It quivers from the Forge
 Without a color, but the light
 Of unanointed Blaze.
 Least Village has its Blacksmith
 Whose Anvil's even ring
 Stands symbol for the finer Forge
 That soundless tugs - within -
 Refining these impatient Ores
 With Hammer, and with Blaze
 Until the *Designated Light*
 Repudiate the Forge -

鍛冶屋のイメージを用いて、人間の魂の鍛錬をうたった詩である。“a Soul at the White Heat” (白い熱で精錬された魂) とは「ヨハネの黙示録」のイメージであろう。

I counsel thee to buy of me gold tried in the fire, that thou mayest
 be rich; and white raiment, that thou mayest be clothed. . . . (24)

つまり “gold tried in the fire” (神の火で精錬された金) とは purify された新生の魂である。また復活の栄光をもたらす清い心でもあり、霊的現実を見分けるものでもある。そういうものを求めるためには、“crouch within the door” (扉の内へ入れ) と言っている。つまり 640番 の詩でも触れたが、<扉>は肉体と精神の境界で、霊的な世界へ入ることであろう。“Designated Light” (選定された光) は神の光であり、“Repudiate the Forge” (ふいごを拒む) は、現世及び肉体の否定の象徴である。

このような魂をもって、更に深く入って行こうとする神秘の世界、云い換えれば「黙示録」の中で、神が勝利者 (白い衣を着た人々) に約束された永遠の世界、それは<神の^{きよ}きよ^{わざ}業の完成>された世界であり、そこへ入って行くことを、Dickinson は<白い偉業>と呼んだのである。

922 (1864)

Those who have been in the Grave the longest -
 Those who begin Today -
 Equally perish from our Practise -
 Death is the other way -

Foot of the Bold did least attempt it -
 It - is the *White Exploit* -
 Once to achieve, annuls the power
 Once to communicate -

つまりこの世界は、踏破すれば見れるようなものではなく、浄化され聖化された魂を通して視る世界である。それは Amherst の自宅の二階の一室、その中にいる Dickinson の、小さな小さな胸の中の世界であった。しかしそれは〈無限に広がる宏大な世界〉なので “Foot of the Bold did least attempt it” (大胆不敵の足もかつてそれを試みたことはない) し、伝達力もその能力を失ってしまうのである。“I could not see to see.” (見るために見えなくなった) (# 465) と詠ったあの永遠の世界。そしてこういう世界を告げるのが、彼女の “. . . letter to the World” (世の人々への手紙) (# 441) であったと言えよう。Henry W. Wells は “She [Dickinson] well knew that she followed her own star.” (彼女は自分の定められた星を求めることをよく知っていた)⁽²⁵⁾ と言っているが、この彼女の求めて行くべき〈白い偉業〉の星こそ、「黙示録」の「輝く曙けの明星」⁽²⁶⁾ ではなかったろうか。この詩における白のイメージは、具体的に何かを指すというより、“Exploit” を強める強意語のようにさえ感じられる。実に巧みな用い方ではないだろうか。

結

以上 Emily Dickinson に於ける〈白〉の意味について考えてきたが、彼女の人生の選択であった “White Election” (白い選択) から、その完成である “White Exploit” (白い偉業) への厳しい思索が、彼女の真に生きた清い生涯であったと言えよう。

人生を深くみつめ神を強く求めた Dickinson の生涯にわたる敬虔な態度は、晩年に作られた次の4行詩に、限りない美しさで見事に示されている。

1758 (?)

Where every bird is bold to go
 And bees abashless play,
 The foreigner before he knocks
 Must thrust the tears away.⁽²⁷⁾

鳥や蜂が自由に飛びまわっている死も悲しみもないエデンの園に入ろうとする者は、神の国への扉をノックする⁽²⁸⁾ 前に、神からではなく自ら涙をぬぐって、⁽²⁹⁾ 霊的現実をはっきりと見きわめなければならないのである。こういう宗教的な態度をもって一生を送った Dickinson は、“My life closed twice before its close-”（わたしの生涯はその終りのまえに二度終った）（# 1732）と詠ったように、神と共に一度は死んだが、しかし新たに生まれ、純白のドレスに身をつつみ、勝利者として歩み始め、ついには文学的偉業を成しとげたのである。そして、“perhaps the finest, by a woman, in the English language”（英語で詩を書いた最大の女流詩人）⁽³⁰⁾ と評されるまでに至った。「ホセア書」の言葉を借りれば「アコル（苦難）の谷より望みの門へ」⁽³¹⁾ の歩みであったと言えよう。

小論を書き終えた今、私の眼前には White Ring（白い輪）に結ばれた、Dickinson の、‘death’ とか、‘eternity’ とか ‘life’ などの課題が一杯ある。Dickinson が聖書を poke（つく）したように、私も今後これらを一つ一つ、つついて、深く研究してみたいと思っている。

〔註〕

1. Richard B. Sewall (ed), “Introduction” to *A Collection of Critical Essays*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J. (1963), p. 5.
 “Many of our essayists, . . . have assumed that Emily’s life was broken in two by the Rev. Charles Wadsworth of Philadelphia. We know that she met the man, that he called on her twice in Amherst, that she wrote letters to him and revered him. That is all. As Mrs. Bingham points out, she had other friends just as vital, perhaps more so, and one final, documented relationship as near to a love affair as any attachment of her life—with Judge Lord of Salem. Beyond that, everything is speculation.”
 Conrad Aiken, *A Collection of Critical Essays*, “Emily Dickinson,” p. 10.
 “One of the co-editors of *Poems: Second Series* assures us that this voluntary hermitage was not due to any ‘love-disappointment’ . . . ”
 James Reeves (ed), “Introduction” to *Selected Poems of Emily Dickinson*, Heineman (London, 1966), pp. xi; xxvi.
 “She did in fact lose him [Wadsworth] in the spring of 1862; this was the crisis of her life. . . .”
 “She withdrew for many reasons, but a broken heart was not one of them.”
2. Allen Tate, *A Collection of Critical Essays*, “Emily Dickinson,” pp. 19-20.
3. James Reeves, “Introduction,” p. xxviii.
 Thomas H. Johnson (ed), *Emily Dickinson Selected Letters*, The Belknap Press of Harvard University (Cambridge, 1971), p. 209.
4. James Reeves, “Introduction,” p. xxvi.

5. Thomas H. Johnson (ed), *The Complete Poems of Emily Dickinson*, Little, Brown and Company (Boston, 1960).
以下詩の引用はすべてこの Johnson 版による。従って詩に付けた番号もそれ (THJ) に準ずる。
6. Charles R. Anderson, *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*, "Ecstasy," Holt, Rinehart and Winston (New York, 1970), p. 185.
7. Austin Warren, *A Collection of Critical Essays*, "Emily Dickinson," pp. 113; 115.
8. *Revelation*, 3: 45; 12.
「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。」
9. 舟喜順一 翻訳監修「聖書註解」キリスト者学生会発行 (1963), p. 1206.
「当時の読者には、裏側の七つの封印からそれがなんであるかは間違いなくわかっていた。ちょうど郵便為替制度がなかった時代のドイツでは、五つの封印のしてある手紙は現金書留だということを知っていたように、……七つの封印で封じられている文書は、遺言書だということを知っていた。」
10. *Revelation*, 5: 5.
“... hath prevailed to open the book, and to loose the seven seals thereof.”
11. *Revelation*, 19: 7-8.
「わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く（白い）汚れのない麻布の衣を着ることを許された。」
12. Charles R. Anderson, *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*, "Words," pp. 31-32.
13. Thomas H. Johnson (ed), *Emily Dickinson Selected Letters*, p. 172. "You inquire my Books - For Poets - I have Keats - and Mr and Mrs Browning. For prose - Mr Ruskin - Sir Thomas Browne - and the Revelations." (25 April 1862)
14. 藤井 武 全集 Vol. 5「黙示録研究」岩波書店 (1971), pp. 282-292.
15. James Reeves, "Introduction," p. xlvi.
"On the technical side—in so far as she is allowed to have had any technique at all—she has been censured for three faults: bad grammar, bad rhymes, and irregular rhythms."
16. *Revelation*, 7: 9; 14.
17. David J. M. Higgins, *A Collection of Critical Essays*, "Emily Dickinson's Prose," p. 164.
"On the rare occasions when Emily met her friends, she made almost theatrical entrances, dressed completely in white and carrying flowers."
18. Archibald MacLeish, *A Collection of Critical Essays*, "The Private World: Poems of Emily Dickinson," p. 152.
19. この詩に関して「シルフェ」(明治学院大学英語英文学研究誌) 11号の拙論『Emily Dickinson の詩に於ける "White" のもつイメージの一考察』を参照。
20. *Genesis*, 8: 11.
「はとは夕方になって彼のもとに帰ってきた。見ると、そのくちばしには、オリーブの若葉があった。ノアは地から水がひいたのを知った。」

21. Percy Bysshe Shelley, "Ode to the West Wind." l. 70.
22. James Reeves, "Introduction," p. xxxiv.
23. *Revelation*. 4. 1.
24. *Ibid.*, 3: 18.
25. Henry W. Wells, *A Collection of Critical Essays*, "Romantic Sensibility," p. 45.
26. *Revelation*, 22: 16.
27. Martin Armstrong, "The Poetry of Emily Dickinson" in *The Recognition of Emily Dickinson* edited by Caesar R. Blake and Carlton F. Wells, Ann Arbor Paperbackss, The University of Michigan Press (1968), p. 106.
 "Like Blake, whom so often she recalls, she sees *a world in a grain of sand, and a heaven in a wild flower*. That attitude is beautifully shown in a poem of four lines."
28. *St Matthew*, 7: 7.
 「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」
29. *Revelation*, 21: 3-4.
 「神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。」
30. Martin Armstrong, "The Poetry of Emily Dickinson," p. 108. "I have no doubt that a volume of selected poems would reveal the fact that her poetry, as Mr. Conrad Aiken in his recent anthology of *Modern American Poets* claims, is 'perhaps the finest, by a woman, in the English language.' I quarrel only with his 'perhaps'."
31. *Hosea*, 2: 15.

(この原稿は第25回日本英文学会支部大会〔於高知大学〕で発表したものに手を加えたものである)